

# Intercultural Language Learning (文化間言語学習) が目指す学習者が 育成していくべき日本語能力

トムソン 木下 千尋<sup>1</sup>

## キーワード

Intercultural Language Learning (文化間言語学習) 文化間コミュニケーション能力  
オーストラリアの外国語教育 「Art Speaks Japanese」

## 1. はじめに

本稿では、オーストラリアの外国語教育で大きな影響力を持つ Intercultural Language Learning (IcLL) を取り上げ、その視点から学習者が目指し、獲得すべき日本語能力を考えるものである。

IcLL は、よく「異文化間言語学習」と和訳されるが、その考え方には目標文化を特に異なるものと取り立てる意図はないので、本稿では「文化間言語学習」という訳語の方がふさわしいという立場を取る。IcLL は、また、Intercultural Language Learning and Teaching (ILTL)、あるいは、Intercultural Language Teaching and Learning (ILTL) として、学習だけでなく、その教授も含めた名称で取り上げられることもある。しかし、IcLL は本来学習者を主体におく考え方なので、本稿ではできる限り学習者の視点から論じていきたいと思い、IcLL「文化間言語学習」とした。また、本特集の主題は「育成すべき日本語能力とは何か」である。IcLL はオーストラリアの学校教育を中心にトップダウンで広がってきたという経緯もあり、生徒達の学習より、言語政策や、教育省のプログラム、教師が使う IcLL 用教材などという「教師が育成する」日本語能力に視点が置かれがちだ。だが、本稿では「学習者自身が育成していく」日本語能力という意味で、学習者が目指し、獲得する日本語能力に注意を向けられたらいいと思っている。

まず、次節で IcLL を概観し、それから IcLL に関連した日本語能力を考えてみたい。

## 2. IcLL、文化間言語学習

IcLL は、言語と文化は切り離すことができないという基本的な考え方を礎としていて、非常に大まかな言い方をすると、言語学習を通じて国際社会の一員として積極的に社会生

活を営んでいける人間となる基礎を作る学習の考え方の提案であると言えると思う。IcLLでは、狭義の言語学習が究極の目標ではなく、言語学習は、目標であると同時に手段であると捉えられている。

IcLLが注目を浴びたのは、2003年にLiddicoat 他がオーストラリア政府の教育省（当時はDepartment of Education, Science and Training）に提出した「文化間言語学習に関する報告書」（以下、報告書）に始まる。報告書では、IcLLは、「学習者が他言語、他文化との関係性において、自言語、自文化の理解を発展させていくことに関わる<sup>2)</sup>」（Liddicoat 他 2003：1）考え方であるとし、五つの原則にその特徴が現れるとした。その五つの原則は、以下の通りである。

- 主体的構築
- 関連づけ
- 社会的相互行為
- 内省と熟考
- 責任

そして、IcLLはその全体的な目標を以下の五つとしている（p.46）。

- すべての言語、文化を理解し、尊重する。
- 自分の言語、文化（複数のこともある）を理解し、尊重する。
- 目標言語、文化（複数のこともある）を理解し、尊重する。
- 複数の言語、文化の間に介在する方法を理解し、尊重する。
- 恒常的な目標として文化間に介在する際の感受性を発育する。

この原則や目標からもIcLLが従来の狭義の言語学習観を大きく超えていることがわかる。

IcLLは、2005年に発表された「オーストラリアの学校における言語教育に関する国家声明、および2005～2008年度国家計画」（MCEETYA 2005）で、学校教育における言語政策として奨励されることになる。これは、IcLLが、国家声明の掲げる外国語学習の六つの意義（下記）と相性が良かったからと言えるかもしれない。あるいは、IcLLが国家声明に影響を与えた可能性もある。

- 学習者を知的に、教育的に、文化的に高めることができる。
- 学習者が文化を越えてコミュニケーションできるようになる。
- コミュニケーションと理解を通して社会とのつながりに寄与できる。
- コミュニティに存在する言語的文化的リソースをいっそう高めることができる。
- オーストラリアの戦略的な経済・国際発達に貢献できる。
- 個人の雇用や職歴を高めることができる。

（ジョナック他 2008：118）

このような国家声明が生まれる背景には、オーストラリアが多文化国家として自国の持つリソースを活用しながら、国民間の、そして、国際社会でのコミュニケーション力を育成していく方略が見てとれる。外国語を使って他国の人々と国際的に関わってほしいというより、実は、外国語学習で身に付けた力を、自分の身の回りの多様な他者とうまく相互作用していくために使ってもらいたいという方が先決であると解釈することも可能だ。IcLLを生んだ社会的背景については、太田（2007、2010）や、ジョナック他（2008）

などが詳しいので、参照されたい。

IcLL はオーストラリアで提唱されているものの、国際的に孤立した考えではない。アメリカの「スタンダーズ」<sup>3</sup> やヨーロッパの「CEFR」<sup>4</sup> なども、言語教育と其の内容となる文化をどのように関連づけていくかが一つの焦点となっている点や、言語使用は人と人との多様な社会的営みのなかで捉えられるべきだという点で共通している (Byrnes 2010)。

### 3. IcLL の目指す能力

言語教育の目標には「教育的」なものと「機能的 / 実用的」なものがある (Byram 2010)。IcLL では、おそらく「機能的 / 実用的」とされる部分が従来の言語学習の目標に当たり、「教育的」とされる部分は、言語学習を手段として「学習者の自己改革を目指す」(Scarino 2010: 234) ところにあるのではないかと。二つの目標には別のタイプの能力が要求されるように思えるが、IcLL には、これを統合しようという試みが見られる。

例えば、報告書中、先の五つの原則の一つである「主体的構築」つまり、学習とはある社会文化的状況下での目的を持った主体的な知識の構築であるという原則には、次のような言語使用が想定される。

- 主体的な言語文化との関わりを通じ、言語文化を探究する。
- 自分自身の文化間交流の多面的な場を作る。

そして、この原則は、以下のような学習者の営みで具現化されるとする。

- 学習者は、様々なタスクを目的を持って遂行するために言語を使い、その過程で人、テキスト、テクノロジーと相互作用し、新しい発見や意味作りをする。
- 学習者は、言語的、文化的相違に対処する個々の方法を育成する。
- 学習者は、文化的に条件づけられている人間の行動を観察、分析する。(Liddicoat 他: 47)

この三点は、そのまま、学習者に求められる能力とも書き換えることができるだろう。報告書には、五つの原則のすべてに関して、「学習者」を主語とした具現化の営みがリスト化されている (Liddicoat 他: 47-51)。

### 4. IcLL の具体的な検討

このような学習者の営み、あるいは、学習者が目標とする能力を具体的に検討してみたい。ここでは、ニューサウスウェールズ州立美術館と国際交流基金のシドニーセンターの協力で作成された IcLL を基盤とする日本語教材「Art Speaks Japanese」(Art Gallery of NSW and Japan Foundation 2007)<sup>5</sup> を例とする。「Art Speaks Japanese」には、ニューサウスウェールズ州立美術館が保有する平安時代から現代にわたる十六の日本美術作品が取り上げられ、高画質の写真とともに、それぞれをめぐる日本語言語活動が提案されている。

作品の十三番目は 1900 年頃の作とされる薩摩焼きの「虫かご」である。竹のかごに似せた陶芸のテクニクと、金をベースにした美しい模様の絵付けがすばらしい一品だ。この作品を使い、小学校四年生程度を対象とした活動は、まず、その大きさや色を日本語で

表現するもの、桜、水などの模様の絵柄と日本語の言葉を結びつけるもの、童謡「虫の声」（あれ松虫が鳴いている、チンチロ……）を鑑賞するもの、「虫の声」の歌詞を別の虫の例で書き換えるもの、さらに、オーストラリアの虫を思い起こし歌詞を書き換え、自己表現するものがそろっている。

教室では、このような活動以前に、この物体は一体何なのかという疑問が必ず出てくるはずだ。「虫かご」だと言われても、なぜ虫をかごに入れる必要があったのかという疑問が残る。食用にかごに虫を集めていたのかという発想<sup>6</sup>は出てくるかもしれないが、虫をペットとして飼っていたという発想はなかなか出てこないようだ。虫がペットで、虫の声は騒音や雑音ではなく、鑑賞に値するものとされ、それぞれの声音が、チンチロ、リンリン、ガチャガチャと聞き分けられて表現されるというのは、たいていの生徒達にとって新しい発見だろう。

この「虫かご」の存在を理解、尊重し、受け入れるということは、生徒達に様々な能力を要求する。「虫」を「害虫」や「食べ物」ではなく「ペット」として新しく意味付けする力、非常に高価だろうと推測されるこの「虫かご」に虫を飼うという行為の持つ意味を分析し、人と虫の関係を捉え直す力、「うるさい虫の声」という評価を「面白い虫の声」と再評価する力、などが必要になる。さらに上記の活動を通じて、虫の声音を言語的に表現する習慣を発見し、自分の身の回りの虫の声音にも今までと違った態度で耳を傾け、自分なりの解釈でそれを表現してみることも要求される。

生徒達と「虫かご」、そして、童謡「虫の声」との相互作用の成果は、生徒達に「虫かご」を日本語で描写させるだけに留まらず、「虫かご」や「虫の声」にまつわる日本人の行動様式を解釈させ、新しい視点を使つての自己表現にまでつながっていく。そこで生まれるオーストラリア・バージョンの「ムシのコエ」の歌詞は、日本のものでもオーストラリアのものでもなく、それぞれが、生徒個人の持つ文化間の場で言語的に表現される世界にただ一つの作品となるだろう。

多民族多文化国家オーストラリアにおいて IcLL が力を発揮する所以は、この相互作用が、生徒達と「虫かご」の間に留まらず、「虫かご」という題材を介して、様々な文化背景を持った生徒間の相互作用に広がる可能性にあるのではないかと思う。

## 5. 日本語能力の守備範囲

続いて、報告書にそって、「日本語能力」と言われるものの守備範囲を考察してみたい。

「言語能力」を語るとき、昨今それが文法や語彙だけを指すとする論調は見られない。報告書も、「コミュニケーション能力」という表現を使って議論を進めている。社会言語学の分野では、Hymes (1986) などがコミュニケーション能力を「あるスピーチコミュニティの中で適切なコミュニケーションをするために話者が知っておくべきこと」と定義していたが、「知っておくべきこと」の内容があいまいであった。また、第二言語学習者の場合、この「知っておくべきこと」を、母語話者規範に照合して割り出そうとするのは時代遅れの考え方である (Kramsch 1999)。学習者の必要とする能力は母語話者のものとは大きく違うからである。

母語話者のメッセージを適切に解釈するために「知っておくべきこと」は、大きく「文化」と括られると言ってもよいだろう。Canale & Swain (1981) の著名なコミュニケーション能力のモデルは、文法能力、社会言語能力、方略能力に分かれ、「文化」は社会言語能力の範疇で扱われている。しかし、ここで扱われる社会言語能力は、場面に適切な表現を選択し、文法的に表現するというものに留まっている (Liddicoat 他 2003)。また、Bachman (1990) はコミュニケーション能力を文法能力、文脈能力、哲学的発話内行為能力 (Illocutionary competence)、社会言語能力と下位分類しているが、社会言語能力内の文化的なものは主に比喩や、文化特定の言い回しなどに限られている。続いて、van Ek (1986) のコミュニケーション能力のモデルは、言語能力、社会言語能力、文脈能力、方略能力、社会文化能力、社交能力に分けられ、網羅的であるが、このモデルもまた、母語話者規範をもとにしている点で問題がある (Liddicoat 他 2003)。

以上のモデルはみな構造ベースの心理言語学を基盤としたものだが、それに反して、社会文化アプローチのコミュニケーション能力の考え方は、その能力のなかに学習者がコミュニケーションに持ち込む既存の態度や行動を包含しようと試みた。Byram (1997) の文化間コミュニケーション能力のモデルは、言語能力、社会言語能力、文脈能力に加えて、文化間能力 (Intercultural competence) を挙げ、それは、Byram & Zarate (1994) と Byram (1997) による以下の五つの *Savoirs* (知っていること) だとする。

- 「知っていること」自分と他者の、そしてインターアクションの、また、個人と社会の知識
- 「理解の方法を知っていること」解釈の、そして情報を関連づけるスキル
- 「学ぶ方法を知っていること」新知識を発見する、あるいはその発見のためにインターアクションするスキル
- 「どうあればいいかを知っていること」自身を客観的に捉え、他者を尊重する態度
- 「自分の立場を明らかにする方法を知っていること」批判的、政治的な気付きを促す教育

IcLL は、文化間コミュニケーション能力のモデルを学習の概念と結びつけ、文化間言語学習モデルとしたものである。

ここまで述べてきて、本稿の二節で見た IcLL の全体目標を思い起こすと、コミュニケーション能力の、また本稿の関心事である日本語能力の「守備範囲」はどこまでなのかということが非常に気になってくる。オーストラリアでは、IcLL が初等中等教育で取り入れられているということも、この「守備範囲」を検討する上で重要なポイントとなる。

初等中等教育では、すべての教科で教科学習と平行して子供達の人としての健全な発育への貢献が要求される。外国語教科も同様で、たとえそれが明文化されていなかったとしても、単語や文法を覚え、簡単な会話ができるようになるだけのものではなく、いろいろな意味で他の教科とともに子供達を育てていたはずだ。IcLL は、明文化されていなかった部分を明確にし、さらに補強し、単語や文法以外の、人作りへの貢献も文化間コミュニケーション能力の「守備範囲」内であると宣言したのである。それどころか、人作りへの貢献は実は外国語教科の得意分野であると、一歩踏み込んだ宣言をしたのである。

IcLL の文化間コミュニケーション能力は、日本で提唱される多文化共生能力と非常に

近い考え方のように思われる。が、多文化共生能力は、学校教育の中で誰が責任を持って育成していくのが不明確である感は否めない。IcLLの文化間コミュニケーション能力は、外国語教育がイニシアチブをとって育成していこうという責任の所在が明確である点が、遂行可能性を高めているように思える。

また、「虫かご」の例からも明らかなように、IcLLの外国語授業は、生徒達に疑問や驚きや感動を与え、感受性を育て、探究心をくすぐり、創造性と表現力を発揮する場を与えることができる。オーストラリアは多民族多文化国家ではあるが、その基盤はエリザベス女王を君主とする英国連邦の一国であり、英語を母語とする多くの生徒達にとっては、英国、あるいはヨーロッパ文化が生活の根底にある。その生徒たちにはおそらく日本語、日本文化という題材は、身近なフランス語やドイツ語よりもずっと大きな疑問や驚きや感動を提供する可能性を持っているのだろう。

## 6. IcLLの課題

国家宣言で取り上げられ、教師研修を繰り返し行って初等中等の教室に普及されてきたIcLLだが、課題もある。

一つは、IcLL自体の解釈がその創始者達の間でも揺らいでいること（太田2007）もあって、実際にIcLLが教室での実践でどの程度本来の意図にそって理解され、どのように具現化されているかが非常に多様であることだ（Mahoney 2009）。知識としての文化の紹介に留まっている教室や、文化の単元は英語で行って、言語学習と切り離されてしまっている教室などもあるようだ。

もう一つは、IcLLの理念に沿った授業の成果は評価が非常に難しいということである。これは、言い換えれば、授業が育成を目指す能力の特定化が困難だとも言える。しかし、Scarino（2010）が疑問を呈するように、IcLLによる学習成果は、従来の評価観に基づいて評価できるのか、あるいは評価すべきなのか、人の価値観を含有する「文化間能力」は、どのように客観的に評価できるのか、さらに評価していいのか。おそらくIcLLは、新しい評価観をも生み出していかなければならないのだろう。

## 7. 生徒達から大人の学習者へ

IcLLが生徒達の中に育成しようとしている「文化間コミュニケーション能力」は、言語の機械的な使用能力を超え、文化を理解、尊重する能力である。しかも、その能力は文化を多様な人々とそのさらに多様な実践の情報として理解、尊重するだけではなく、文化を他者とのコミュニケーションにおいて意味交渉をするための枠組みであり、個々人がそれぞれの持つ世界を理解し意味付ける枠組みでもあると理解、尊重する能力である。

オーストラリアの実践では、初等中等教育の大義名分のもと、教育的意味の大きい「文化間能力」を公に包括した。実は大人が対象の外国語教育でも「文化間能力」の必要性は同様にあるはずだ。複数言語、複数文化の混在、共存が当たり前のオーストラリア社会では、あるいは当たり前になりつつある日本社会でも、外国語を使うということは、単にコ



コミュニケーション行為を達成するという社会実践ではない (Scarino 2010)。外国語を使い、外国語話者と、あるいは、外国語のアーティファクトとインターアクションし、その過程で自己表現をすることは、言語によって社会を映し出し、同時に社会を構築していくプロセスであるからだ。そこには「文化間コミュニケーション能力」が必要なはずだ。

## 8. おわりに

本稿では、オーストラリアの外国語教育、特に初等中等教育で政策として取り入れられている IcLL、文化間言語学習の育てる文化間コミュニケーション能力について概観し、考察してきた。外国語を学び、それを使って相互行為を行うことは、他者、他文化の理解、尊重を筆頭とした、様々な人間力を育成することであり、外国語教育は、この人間力の育成を前面に押し出して胸を張っていいのだと言いきったところが新しいと言える。

日本社会はオーストラリア社会に比べてまだまだ多様性、多文化性、多言語性が低く、「日本」の殻に閉じこもっていても日々の生活が成り立つようだ。そのなかで海外に出て行く若者の数が減り、内向き志向の若者が増えていると聞く。しかし、他者、他文化との相互行為を拒絶し続けているわけにはいかない。世界はグローバル化を続け、「国際」から逃れられる「国内」は消滅しつつある。日本社会にも多様化の波は押し寄せていて、多文化共生能力が日本に住む日本人にも押しなべて要求される日は近いだろう。加えて、「同一民族」と誤認されていた、また、「一億層中流」と言われていた時代は終わり、「日本」自体の持つ文化群の多様性と、そのもたらすコミュニケーションギャップや格差も直視すべき時が来ている。IcLL の提唱する文化間コミュニケーション能力は、解決されなければならない課題を抱えてはいるが、日本の日本語教育に示唆を与えるだけでなく、日本の英語教育を通じてこれからの日本人の人間力を高める教育に大きく寄与する可能性があるのではないかと思う。

## 謝辞

本論は財団法人博報児童教育振興会の助成事業で早稲田大学に研究員として滞在中に執筆した。財団、および早稲田大学各位にお礼を申し上げる。

## 注

- 1 とむそん・きのした・ちひろ (ニューサウスウェールズ大学日本研究課程・准教授、早稲田大学大学院日本語教育研究科・客員研究員)
- 2 本稿中の和訳の訳責は、他に表示がない場合、筆者にある。
- 3 外国語学習ナショナル・スタンダーズ・プロジェクト (1999) による『21 世紀の外国語学習スタンダーズ』。日本語版が以下よりアクセスできる。[www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/.../sy\\_honyaku\\_9-lusa.pdf](http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/.../sy_honyaku_9-lusa.pdf)
- 4 ヨーロッパ言語共通参照枠組み (Common European Framework of Reference for Languages) の日本語の説明は以下に。[www.jpf.go.jp/j/publish/japanese/euro/pdf/01-3.pdf](http://www.jpf.go.jp/j/publish/japanese/euro/pdf/01-3.pdf)
- 5 詳しくは、こちら。<http://artalive.jpf-sydney.net/kit.html>
- 6 オーストラリアの先住民、アボリジニの文化では虫は食べ物と認識されることがある。

## 参考文献

- Art Gallery of New South Wales and Japan Foundation (2007) *Art Speaks Japanese-Japanese Language Education Kit from the Collection of the Art Gallery of New South Wales, Sydney*. Sydney: Art Gallery of New South Wales.
- Bachman, L.F. (1990) *Fundamental Considerations in Language Testing*. Oxford: Oxford University Press.
- Byram, M. (1997) *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*. Multilingual Matters: Clevedon.
- Byram, M. (2010) "Linguistic and cultural education for *bildung* and citizenship." *The Modern Language Journal*, 94(ii): 317-321.
- Byram, M., & G. Zarate (1994) *Définitions, Objectifs et Evaluation de la Compétence Socio-Culturelle*. Strasbourg: Report for the Council of Europe.
- Byrnes, H. (2010) "Revisiting the role of culture in the foreign language curriculum." *The Modern Language Journal*, 94(ii): 315-317.
- Canale, M., & M. Swain (1981) "Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing." *Applied Linguistics*, 1(i):1-47.
- Hymes, D.H. (1986) "Models of interaction and social life." J.J. Gumperz & D.H. Hymes (eds.), *Directions in sociolinguistics*. Oxford: Basil Blackwell.
- Kramsch, C. (1999) "The privilege of the intercultural speaker." M. Byram & M. Fleming (eds.), *Language Learning in Intercultural Perspective: Approaches through Drama and Ethnography* (pp. 16-31). Cambridge: Cambridge University Press.
- Liddicoat, A.J., L. Papademetre, A. Scarino, and M. Kohler (2003) *Report on Intercultural Language Learning*. Canberra: Department of Education Science and Training.
- Mahoney, C. (2009) "Teaching culture in the Japanese language classroom: A NSW case study." *New Voices: A Journal for Emerging Scholars of Japanese Studies in Australia*. 3: 104-125.
- MCEETYA, Ministerial Council On Education, Employment, Training And Youth Affairs (2005) *National Statement For Languages Education In Australian Schools: National Plan For Languages Education In Australian Schools 2005-2008*. South Australia: Hyde Park Press. [http://www.mceetya.edu.au/verve/\\_resources/languageeducation\\_file.pdf](http://www.mceetya.edu.au/verve/_resources/languageeducation_file.pdf)
- Scarino, A. (2010) "Assessing intercultural capability in learning languages: A renewed understanding of language, culture, learning, and the nature of assessment." *The Modern Language Journal*, 94(ii): 324-329.
- van Ek, J.A. (1986) *Objectives for Modern Language Learning*. Strasbourg: Council of Europe. Strasbourg: Council of Europe.
- 太田裕子 (2007) 「多文化社会に生きる子どもへの「異文化間言語学習」の意味 オーストラリアにおける「内容」をめぐる議論から」『早稲田大学日本語教育学』第1号:81-93.
- 太田裕子 (2010) 『日本語教師の「意味世界」—オーストラリアのこどもに教える教師達のライフストーリー』東京: ココ出版
- ジョナック、キャシー、根岸ウッド日実子、松本剛次 (2008) 「オーストラリアの初中等教育における外国語教育の現在と国際交流基金シドニー日本文化センターの日本語教育支援— Intercultural Language Teaching and Learning の考え方を中心に—」国際交流基金 日本語教育紀要 第4号:115-130.